ONE　MORE　LIFE　〈もう一度の人生〉

志乃　悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＯＮＥ　ＭＯＲＥ　ＬＩＦＥ　〈もう一度の人生〉

【Ｎコード】

Ｎ３１８１Ｚ

【作者名】

志乃　悠

【あらすじ】

Ｐ３Ｐの二週目の話です。

物語の主人公とは別の主人公の位置で進みます。

プロローグ

ニュクスの脅威は去った。

ニュクスを封印し、影時間は消え、人々の記憶からも影時間は消えた。

後は自分だけ・・・

最終決戦から一ヶ月・・・・・・

今、普通の高校生として、日々の生活を過ごしている。

影時間が消えたせいなのだろう、あの戦いのこと、今まで確かにあった絆、すべてが夢のようになっている。

自分も眠る時間が長くなっており、段々と会える人が減っている。

そして・・・・3月5日『約束の日』・・・・・・

この日はいつもより早くに目が覚めた。
身支度をし、ぼ～としていると、コン、コンとノックされた。
「あの、アイギスです。開けて・・・もらえませんか？」
ドアをゆっくりと開けるとアイギスが立っていた。
「よかった・・・また、あなたと会えた・・・」
どうやら、アイギスにも記憶はあったようだ。
二人で卒業式をサボり、約束をしたあの場所に・・・
約束の場所に着くとうららかな陽射しと、穏やかな風が、心地いい。
寝転ぶとアイギスが膝枕をしてくれ、瞼をゆっくりと閉じる。
アイギスの話を聞き、皆がこっちに来る。
多分、今、幸せを感じているのだろう。
「ありがとう・・・本当に・・・疲れたでしょう？」
「今はゆっくり休んで・・・わたしはずっと、ここに居るから・・・
」

「みんなとも、すぐに会えるから・・・」

アイギスの優しい言葉に任せ、意識を手放した・・・

プロローグ（後書き）

次回の投稿は１２／１４です

登場人物

主人公　（裏）

夜霧（よぎり）　悟（さとる）

ＥＱＵＩＰ

武器：天国

防具・体：明星の鎧

防具・足：明星の靴

アクセサリー：全能の真珠

ＰＥＲＳＯＮＡ

オルフェウス

タナトス

アリス

ノルン

オルトロス

クー・フーリン

スサノオ

キングフロスト

セト

オーディン

主人公　（表）

朝倉（あさくら）　沙希（さき）

ＥＱＵＩＰ

武器：岩融
防具・体：悠久の鎧
防具・足：悠久の靴
アクセサリー：エノク書

PERSONA
オルフェウス　（女性仕様）
メサイア
キクリヒメ
ユニコーン
サラスヴァティ
スカアハ
ヤクシニー
ティターニア
アヌビス
ヴァルキリー

登場人物（後書き）

性格などは本編の方でわかってもらえば助かります。
ペルソナの詳細は後日投稿します。
次回の投稿は１２／１６です。

4月6日に逆戻り・・・

目を開けると、目の前には見知らぬ女子高生が座っていた。
自分と似たようなイヤホンを耳にあて、静かな寝息を立てている。
周りを見渡すと、どうやら電車の中らしい・・・
・・・さっきまでアイギスと一緒に学校の屋上にいたはずなのに・・・
・
すると、一年前に聞いたことがあるような車内放送が流れた。

『え～、本日は、ポイント故障のためダイヤが大幅に乱れ…お急ぎのお客様には、大変ご迷惑をおかけしました。次は～、巌戸台～・・・・』

しばらくすると、電車は止まった・・・目の前の少女は目を開けてこちらをジーと見ている。
まだ、寝ぼけているようだ。

『巌戸台、巌戸台です。この電車、辰巳ポートアイランド行き、本日の最終電車となっております。お乗り忘れの無いようご注意ください』

車内放送がまた流れると目の前にいた彼女はあわてて降りていった。
自分も降りる事にした。

もうすぐ0時だ・・・もし、あの”時”が消えていれば0時になってもならないはずだ。

改札口の近くの椅子に座って待つことにした。

『カチ、カチ、カチ、カチャン』

一瞬だけ目を閉じ、開けると・・・そこには象徴化した人、暗い町、そして”タルタロス”があった。

何をしていいのか分からなく、今はあの寮へと足を運んだ。

”月光館学園　巌戸台分寮”

扉の前に着くと、中から声が聞こえた。

「…誰！？　この時間に・・・どうして・・・まさか・・・」

ゆかりの声だ・・・だけど、このセリフは一年前に聞いたものだ・・・

扉をゆっくり開けると、寮の中の明かりもついた。

中では、召還器を持ったゆかり、その隣には桐条先輩、そして目の前にはさっき電車で会った少女。

「到着が遅れたようだね。私は、桐条（きりじょう）　美鶴（みつる）。この寮に住んでいる者だ」

「・・・誰ですか？」

「彼らは”転入生”だ。ここへの入寮が急に決まってね…。いずれ、寮への割り当てが、正式にされるだろう」

どうやら、自分にもこの寮の入寮は決まっていたらしい。

「・・・いいんですか？」

「・・・さあな」

「ああ、すまない。彼女は、岳羽（たけば）　ゆかり。この春から2年生だから、君らと同じだな」

一年前、自分が来たときと同じ会話をしている。

「あの、ひとつ質問いいですか？」

今の言葉にゆかりは召還器すぐに隠した・・・

「なにかな？」

「今日２００９年の４月６日ですか？」

「ああ、そうだが？それがどうした？」

「いえ、別に・・・」

「今日はもう遅い。部屋は2階と三階の一番奥に用意してある。荷物も届いてるはずだ。すぐに休むといい」

「あ、じゃ、案内するんで、ついて来て下さい」

俺と彼女はゆかりについて行った。

自分の部屋に案内され、俺はベットへと横たわった。

時間が戻っている、知らない少女が居る・・・頭の中で色々考えたが結局わけが分からなかった。

とにかく今日は早く寝て、明日から行動しようと思い、意識を手放した・・・

４月６日に逆戻り・・・（後書き）

次回の投稿は１２／１８です。

新しい始まり

4月7日

コン、コン
と二回ノックされた。
『岳羽ですけど、起きてますかー？』
ドアを開けると、そこにはゆかりと朝倉（あさくら）　沙希（さき）がいた。
昨日の夜、階段を上がっているときに自己紹介をしたのだ。

「おはよう、眠れた？　あのね・・・私、先輩に案内しろって頼まれちゃったんだ。すぐ出れる？」

「行けるよ」

「じゃ、行こっか・・・」

新都市交通”あねはづる”車内

学校の準備をして寮を出たあと、ゆかりの後ろについていき電車に乗った。
まさかまたゆかりに案内してもらうとは・・・

「通学には、これ使うの、モノレール。珍しいでしょ？　特にココ、海の上進むみたいな感じで好きなんだ。あ、学校があるのは、終点の”辰巳ポートアイランド”って駅ね。聞いた事ない？　辰巳ポートアイランド。人工島の真ん中に、うちの学校があるの。あ、ほら、見えてきた」

『次は終点、辰巳ポートアイランド～』

ようやく目的地”月光館学園”に着いた。

前回はゆかりがいたから注目を集めた
だが、今回はさらにひどい。
片手に花が両手に花になったのだから・・・

玄関に入ると、多くの生徒が掲示板の近くに居た。

「ここからは二人だけで大丈夫だよね。えーと…まず先生にあいさつか。職員室は、この先を左に入ってすぐだから、詳しい事はそこでね。…以上、ナビでした。何か、分からない事とかある？」

「ないよ、朝倉さんは？」

「私もない。ゆかりはどの組？」

「えっ…さあ？まだクラス分け見てないし・・・あのさ。昨日の夜、その…色々見たでしょ？　あれ、他の人には言わないでね。・・・

じゃあね。」

ゆかりは俺たちを残し、掲示板の方へと行ってしまった。

「じゃ、行こっか」

二人して職員室へ

「失礼します。転入生です。どこに行けばいいでしょう？」

「女の子の方はこっちに来て・・・」

どうやら、今回は朝倉さんが鳥海先生のクラスのようだ。

「君はこっちだ」

俺はというと風花の担任、江古田だ・・・

講堂

あれから説教じみたことを何故か言われ、今のテンションはだだ下がり・・・

『えー、諸君らの新しい1年の始まりにあたり…あー、”文筆頻々（ぶんぴつひんぴん）、然る後君子（しかのちくんし）”という言葉を、紹介します。うー、これの意味はといいますと…』

校長先生の長話が続いている…ようだ。自分は寝てるから関係ない

けど。だが、寝ていると後ろの男子生徒が話しかけてきた。

「ねぇ、あのさ、今朝、岳羽さんと一緒に登校してたのって、キミだよね？　見てたぜ。仲良さげだったじゃん？　キミってさ、岳羽さんとどーゆー知り合い？」

この質問はクラスが変わっても一緒のようだ。
さすがはゆかり、有名人。

「おやぁ？　なんか話し声がしましたねぇ？　鳥海先生のクラスの辺りですかぁ？」

「・・・ったく、静かにしてよ！　怒られんの私なんだから！！」

あっちでも話していたのか、自分のクラスには悪い子はいないってね・・・

それから数十分後、ようやく長話が終わり始業式も終わった。

教室

「え～、今日からこのクラスの仲間になる、夜霧（やぎり）　悟（さとる）君だ」

「君の席は山岸の隣だ」

席に座り、山岸に挨拶した。

「よろしく、山岸さん」

「こちらこそ、よろしく・・・」

ま、最初から仲良くなったわけではない。最初はこんなもんと自分に言い聞かせた。

学校が終わり、風花に別れを告げ、すぐさまポロニアンモールの路地裏に行った。

青い扉がひっそりとたたずんでいる・・・

扉の前に立ち、開けるとそこにはいつもの光景があった。

「お久しぶりですね、長いことお待ちしておりました」

「久しぶり、エリザベス。イゴールさんもお久しぶりです。・・・」

「お久しぶりです。まず始めに。あなたはこの世界の住人ではないことは分かりますね？」

「はい、そのことで来ました」

「私たちにも正直なところは分かりません。多分、神のいたずらでしょう」

と言い、イゴールさんは妖気な笑みを浮かべた。

「そういうことにしておきます」

「ワイルドの力はまだ残っていますが、いずれあなたの”中”にあるペルソナしか使えなくなるでしょう。こちらに以前、あなたが様が作られたペルソナ全書があります。この全書も使えなくなるでし

ょう。今のうちに自身のペルソナを決められては？」

「わかった・・・」と言ってペルソナ全書を広げ、十体を選んだ。

「最後に、ここに来るのはこれが最後にしてください」

「何故？」

「新たなワイルドの力がおりますゆえ・・・」

「彼女がか・・・」

「はい、もうひとつ。テオ・・・」とエリザベスが誰かの名を呼んだ。

出てきたのはエリザベスの男性バージョンというべきか・・・・？

「こちらは愚弟のテオです」

「テオドアと申します、以後お見知りおきを」

「では、またいつか会える日を信じております・・・・」

エリザベスのその言葉を最後に俺は”ベルベットルーム”を後にした。

新しい始まり（後書き）

次回は１２／２０です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3181z/

ONE　MORE　LIFE　〈もう一度の人生〉

2011年12月18日00時51分発行